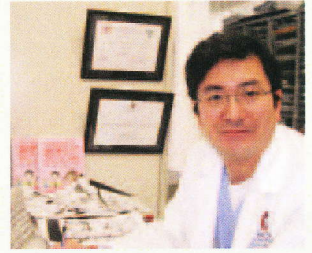


## 女性泌尿器科と漫画 ～「わかってもらえない悩み」に取り組んで～

横須賀市立うわまち病院 泌尿器科 部長 奥井 伸雄  
(漫画家 奥井識仁)



私は泌尿器科専門医ですが、縁があり米国の婦人科に出向し、主にUrogynecologyを中心とした臨床留学を経験しました。このため、泌尿器科と婦人科の両方をカバーする女性泌尿器科を専門としています。女性泌尿器科で取り扱う疾患は、性器脱、尿失禁や頻尿など、まさに境界領域にあたります。これらは大変複雑で、泌尿器科と婦人科の両方の視点で診察を進めなければわからないものです。

例えば、膀胱や直腸が腔側に下がってくる膀胱瘤・直腸瘤(外科では腔内直腸脱といいます)という病気に萎縮性膣炎・尿道狭窄が合併した患者が受診したとします。このケースで多い主訴は、陰部の違和感、慢性膀胱炎、排便障害です。そこで多くの婦人科では、性器脱としては軽度であることからペッサリーの挿入を指導します。しかし、ペッサリーは刺激が強く頻尿がひどくなり、今度は泌尿器科を訪れます。泌尿器科では慢性膀胱炎に対して抗菌剤の投与を繰り返すこととなります。これに対し女性泌尿器科の視点では、萎縮性膣炎の治療と共に、膀胱瘤と直腸瘤に対する腔式手術を行います。同時に尿道拡張なども行います。これだけでも随分症状は改善しますが、慢性膀胱炎に対しては抗菌剤の多用よりもビタミン剤を、排便障害に対しては乳酸菌製剤の投与や食物繊維を積極的に摂るように指導して慢性的な大量下剤投与を避け、3日おきの排便リズムを作るように下剤を緩急つけて処方していきます。つまり、泌尿器科、婦人科、消化器科の手術・投薬を同時に行うことで改善させるのです。

このような女性泌尿器科患者の悩みは、俗にいう「わかってもらえない悩み」にあたります。医療側には同時にいくつもの科の視点を要求されますし、患

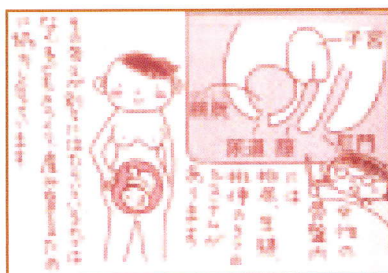
者さん本人も複雑すぎてうまく医師に伝えられないジレンマがあります。現在、女性外来が全盛ですが、ある調査によれば、女性外来に望むものは、「女医」「女性のみのスタッフ」ということよりも、診療科目の枠を超えて「わかってもらえない悩みが理解されるのではないか」という期待にあるのだそうです。

そこで、私の外来では、漫画を活用しています。漫画は、私が典型的な症例をストーリー漫画にアレンジして、新人漫画家に清書してもらったものです。現在は毎月1話の割合で作成しています。ストーリー漫画を患者さんに見せると、患者さん自身、自分と比較して問題点がわかります。そのことで、「わかってもらえない悩み」のポイントを整理して医師に伝えることができるようになります。また、介護する家族や看護師に漫画を見せて説明すると、より具体的に記憶に残る利点もあります。漫画の可能性は無限です。

もし私のストーリー漫画を見かけましたら、ぜひ臨床で使ってみてください。あらかじめ、似たような症状の話を選んでおいて、患者さんに待ち時間の間に読んでいただくのです。きっと、受診までに患者さんの気持ちと訴えは整理されて、円滑で適切な診察が実現できるでしょう。今後は、内科や外科のクリニックでもご活用いただけるよう、取り上げる疾患や漫画のストーリー展開について、さらに工夫を続けていきたいと思ひます。

おくい・のぶお

東京大学大学院修了(医学博士)。泌尿器科専門医・指導医。1999年東京大学助手。2001～03年米国ハーバード大学ブリガム&ウイメンズ病院クリニカル・フェロー。04年横須賀市立うわまち病院泌尿器科部長(現職)。主な著書『在宅でみる排尿介護のコツ』(南山堂)、『婦人泌尿器科へようこそ』(保健同人社)、『マンガでわかる排泄ケアマニュアル』(オークラ出版)、『まんが性器脱・尿失禁(仮題)』(ハート出版、9月上梓予定)、『まんが実用排泄介護百科(仮題)』(講談社、9月上梓予定)。



女性の骨盤の中には、膀胱、子宮、直腸などがあるが、互いに協力し合っているということを示した1コマ



前立腺肥大症での $\alpha_1$ ブロッカーの効果を示した1コマ



認知症の患者さんに対して、勉強を促す介護を説明した1コマ